

# Asian Volunteer Report

Oct 2007

IC アジアンボランティア・サポート基金  
呼びかけ人代表 藤田 悟 (文化交流学科教員)

アジアンボランティア・レポート 2007年10月

サポート基金へのご協力に感謝します。これからもどうぞよろしく。

IC アジアンボランティア・サポート基金の活動は現在 3 年目に入りました。05 年にタイ南部の津波被災地の復興支援に赴きたいという卒業生を支えようと活動を始めてから、6 ヶ月のサイクルを 4 期終了、現在 5 期目の途中です。

第 3 期以降は、夏のカンボジア日本友好学園での教育ボランティア活動に参加する学生および、大饗町商店会の主催する「交流祭」に「出張アジアンバザール」として出店する学生の交通費補助として使われてきました。

また、学園祭アジアンバザールのための買出し資金を貸与し、バザール終了後に回収するというかたちで、アジアンバザールをサポートしてきました。

アジア地域でのボランティア活動に取り組みたいという人をサポートするための基金です。「こういう活動に資金援助をしてほしい」という提案を随時受けつけています。

サポート基金の会計は右記のようになっています。要点ですが、会計報告とさせていただきます。

第 4 期終了時点 (07 年 5 月末) での残金 198,186 円  
(うち AsianBazaar 買出しのための貸出 87,500 円)  
第 5 期に (現在までに) 寄せられた寄付金 144,000 円  
第 5 期の使途

(1) 出張 AsianBazaar 担当者補助	8,000 円
(2) AsianBazaar 買出しのために貸出	160,000 円
現在の基金の残高は	334,186 円
で、うち、AsianBazaar に貸し出しています。	247,500 円

アジアンバザール終了後、買出し資金がサポート基金に返却されますので、夏のカンボジア・プログラムに参加した 11 名の学生に各 2 万円を支給する予定です。

12 月にはサポート基金の第 6 期に取り組みます。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

## The Old Rusty Pump Handle

- Cambodia-Japan Friendship School, Prey Veng, Cambodia

Harris G. Ives

I am acquainted with the pump handle for the artesian well at Cambodia-Japan Friendship school. I am well-acquainted with it - having sought refreshment and cleansing from it several times each day during the two-week stay on campus. With embarrassingly weak hands, I grasped the rusted though ironically ornate handle and pumped water into a basin. I like to think that, with such daily practice, I have gained some strength; I must confess: like some insecure 15 year-old, I have lingered longer than I should have in front of mirrors imagining a new muscle in my right arm.

Vanity aside, I have come to think of that pump and that well as symbols of the tenacity of the Cambodian students. Just as they must daily exert effort to coax water from the well, the students energetically pursue their education. Without textbooks, without

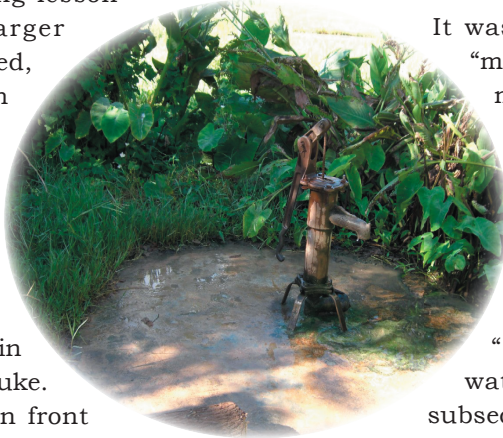


many amenities we associate with schools in the developed countries, these students express an admirable enthusiasm and eagerness to learn. Of course, they know what many others have finally grasped: education is liberation. They will tell you how poor they are. They will tell you how hard their fathers work. There is no mistaking it: they see learning, especially language learning, as the source

of a greater “refreshment” – they also see it as a passport out of drudgery.

The pump also reminds me of the diligence of our IC students who held up to the rigors of teaching English and Japanese in a culture in which comfort is not the key word. Making lesson plans, accommodating larger classes than they anticipated, creating their own flash cards and visual aids, enduring the extreme heat, Ibaraki Christian University students displayed a grace and nobility that endeared them all the more to me.

I worked with two students in particular: Takako and Yuusuke. Seeing them develop ease in front of the English language classes was a joy for me. On the first day I introduced them as co-teachers (we also had excellent Cambodian College students to act as interpreters—though I wanted to minimize translation). Of course I already knew them as students, but it was a very interesting experience



witnessing them as teachers. My approach to the work with Takako and Yuusuke was to show them teaching techniques by modeling and establishing patterns for the first few days. After that, we agreed that they would do much of the teaching, and I would be the assistant.

It was pleasing to see them successfully “mimicking” me and my style. It was even more gratifying to observe them as they amended some of my lessons and incorporated some of their own ideas in the teaching.

I am grateful to Professor Satoshi Fujita who, on the first day, showed me how to pump water from a well. “Harris, it is best to let all of the water flow from the spout before doing subsequent pumping.” I had been pumping too rapidly, thereby creating more work for myself. I thank him for the lesson. I also thank him for leading me to that particular well in Cambodia so that I might meet another beautiful people – and so that I might have the opportunity to see IC students in a new dimension.

## 新しい発見の連続

文化交流学科 1 年次 鈴木 麻由

### ◆ウルルン滞在記!?

このプログラムへの参加が決まった時はとにかく胸が高鳴った。私は入学前からこのプログラムに憧れていた。青年海外協力隊や N G O に漠然と興味をもっていて、海外で日本語を教えることに強い憧れを抱いていたからだ。カンボジアの農村という場所も、ウルルン滞在記みたいで最高だなあと思った。

カンボジアへ行ける、大陸の空気や空の色を感じることができんだ、アジアのど真ん中へ行けるんだ！行きたい！行ける！！早く行きたい！！という気持ちばかりが先行し、ワイルドすぎるサバイバル用品を買い集めたくせに、旅先の会話帳と言われるものは一冊も持たないという変な状態で旅が始まった。

### ◆期待と不安

私は大学の先輩の亜希子さんと一緒に 8 月 10 日にタイから陸路でカンボジアに向った。バックパッカー二人組みは、国境の街ポイペトからフロントガラスにヒビが入ったタクシーの助手席に詰め込まれ、アンコールワットの街、シェムリアップを目指した。悪路をひたすら走りながら見た、どこまでも広がる陸の緑と空の青がとても綺麗だった。

タクシーの後ろの座席に乗っていたバックパッカー達の身の上話を聞いていたら日が暮れ始めた。畑の中にポツポツと建っている高床式の小さな家の中にテレビがついているのがよく見えた。こういうところで生きてきた人達にこれから出会っていくんだなあ…期待と不安を感じながらカンボジア初日が終わった。

### ◆カンボジア日本友好学園

友好学園での日々は本当に楽しくてあっという間だった。友好学園での朝は早い。朝は日が上がる前に起床し、7 時からの授業に備える。朝焼けはいつもきれいで見ていると朝が来たのが嬉しくなってくる。授業が終わって昼からは、各自好きな場所で昼寝したり子供と遊んだりして自由に過ごすか、洗濯や市場での買い物、井戸の水沸かしなどをして過ごした。何をしてもとても充実していた。

夕食後は明日の授業の打ち合わせなどをやる。女性は井戸で水浴び。夜空の下、一日の疲れを冷たい井戸水で一気に洗い流すのはとても壮快で、毎日楽しみだった。井戸で水浴びや洗濯をしながらその日授業であったことや、他愛ないことを話す時間も好きだった。水浴びのあとは通訳のメンバーも交えてみんなで話し込んだり歌を歌ったりする。いつまでも笑いが絶えなかった。

早く寝て早く起きる。暇なようで忙しく、忙しいようで時間はたっぷりあった。



## ◆優しい私の先生

途中授業がうまくできないと感じてめげそうになったこともあった。誰かに何かを教えたことがない、自信がない、しかし一緒に授業をやったメンバーや、すなおで真っ直ぐな生徒のおかげでなんとかやりとおすことができた。

カルタを授業でやったときは生徒達の本当に楽しそうな表情を見ることができ嬉しくて仕方がなかった。「せんせ、せんせ！」といって自分が取った札を見せてくれた生徒たちはみんな本当にかわかった。

授業中に生徒達が見せてくれた、慣れない日本語を一生懸命書く姿や、はにかみながら何回も発音してくれる姿、教えた単語を覚えようとする真剣な顔を思い出すたび元気が湧いてくる。

彼らと接するうちに心についた余分な脂肪が落ちるのを感じた(本当の脂肪もかなり落ちた)。打算や作り笑いを忘れて一緒に笑い合えたのは本当にすてきな体験だと思う。彼らには私が教えた以上にいろんなことを教わった。生徒達はキラキラした優しい私の先生だ。お別れ会で生徒の女の子に「あなたの妹になりたい」と言われた時は涙が止まらなかった。何度も何度もまた会いに行くことを約束

した。

通訳として授業を手伝ってくれた大学生との出会いもこの旅の大きな収穫の一つだ。当たり前だが彼らと私達とは全くバックグラウンドが違う。仲良くなれるか不安もあったが、不安を感じる暇もないほど一緒に過ごした。彼らとは本当にたくさん話をした。カンボジア風の名前を付けてもらったり、クメール語と日本語を教えあったり、虫をプレゼントしてくれたり、一緒に食事もしたし、時々まじめな話もした。とびっきり親切でやさしい彼らには感謝しつぐせない。

## ◆一生の宝物

40日間旅行したが毎日が新しい発見の連続で飽きることが一日もなかった。

この旅行が無事に終わられ、貴重な体験ができたのはたくさんのおかげだ。先生方やへっぽこな私を支えてくれたメンバーのみんなに本当に本当に感謝しています。この経験は一生の宝物です。ありがとうございました。



に、生のお肉が外にぶらさがっていたり、食べ物ほとんどすべてに蠅がたかっていた。私はこの先が不安になった。こんな食べ物なんて食べられない。これより田舎に行って果たして生活していけるのだろうか。しかし、いざリング村に到着すると想像していたものとは違っていた。学校は想像よりはるかにきれいで、学校の外には広大に広がる田んぼや、どこまでも続く青い空があった。

学校の生活はというと、これもまた快適だった。この快適というの、日本とはまた違った意味で快適だった。朝は5時頃起きて6時に朝食と、とても早い。午前中に授業をやり、その後はずっとゆっくりとした時間が流れていた。テレビも電気もない所でやるといえば、まずはお昼寝だった。そしてしばらくすると、元気でかわいい生徒達が学校に遊びに来る。子供達は言葉も通じないのに、学校が終わると毎日来てくれた。よくやった遊びは、折り紙、バレーボール、アルプス一万尺だ。特にアルプス一万尺が子供達の間で人気だった。カンボジアの子供達は、日本の子供より、よく遊び、よく勉強し、家のお手伝いもよくすると思う。遊ぶというの、日本の子供達みたいにゲームがあるわけではなく、外で元気におっかけっこをしたり、虫や花をとったりして遊んでいた。この子供達のおかげでカンボジアで楽しく過ごすことが出来た。

そして、私達には、欠かすことの出来ない、大きな存在がもう一つあった。それは、この友好学園を卒業した、日本語や英語が出来る大学生達だ。彼らは、時には通訳として、時にはガイドとしていろいろと私達を助けてくれた。そして私達と共に生活しよき友達になった。

このようにカンボジアでの日々はとても楽しいものだった。しかし、この旅でカンボジアの現実もみせられた。学校に行けない子供達、ストリートチルドレン、地雷を踏み

# 危ないよ 大丈夫なの？

現代英語学科3年次 矢内 利沙

今年8月、私にとっての大冒険、カンボジア、ベトナム、中国への旅が始まった。その発端はどこから来たのか分からないが、アジア人なのに他のアジアのことを何も知らないし、アジア圏の人とあまり話したことがない、そう思ったならアジアの国について知りたい、行ってみたいという気持ちでいっぱいになっていた。

でもいざ行くことを決めると今度は不安が襲ってきた。今まで海外に行ったことはあったが、全部ツアーみたいに予定が組まれているもので、自分たちで航空チケットを取り、自分たちで考えて行動するのは初めてだった。

それに行く場所はカンボジアの田舎だ。友達や家族に、カンボジアに行くことを話すと、みんな同じ答えが返ってきた。「危ないよ。大丈夫なの？」それを言われると余計不安になった。その結果、行くとすぐに伝染病になり、地雷もたくさん埋まっている、食べ物はなく、住む場所やトイレは全部一緒にかなり汚い所、という勝手なイメージを作ってしまった。

8月15日、ベトナムに着き、その日のうちにカンボジアに行った。ベトナムからカンボジアへ向かうにつれて、建物やきちんとした家が減り、土の道に竹で作った家へと変わっていった。プノンペン(カンボジアの首都)に着き、初めに思ったのは、なんて騒がしい町なんだということだった。クラクションはそこら中で鳴り響き、バイクがものすごくたくさん走っていた。プノンペンのマーケットに、初めて行った時の衝撃はすごかった。かなり暑いというの

手足がない人など、たくさんの貧しい人々が、そこにはいた。なかでもリング村から、プノンペンに帰る時に見た、少年のことが今でも頭から離れない。その少年はまだ10歳にもならないくらいだった。涙目で私達のバスの方をじっと見つめ、手には貰ったお金を入れるカゴを持っていた。しかし、そのカゴを待っている手は肘から下がなかった。その少年を見たとき、私は動くことが出来なくなり、じっと少年を見つめていた。これがカンボジアの現実だとあらためて知り、とても悲しくなった。

私達はスイッチを入れれば電気がつき、水道の蛇口を捻れば水がでる、これを当たり前のように生活している。このような生活は、カンボジアの人々にとっては贅沢中の贅沢なのかもしれない。しかしこの日本の生活に虚しさも感じる。忙しさに追われ、遊びといえばゲームをしたり、テレビを見たりする。いろんなメディアがあり情報が溢れかえっている。カンボジアがもっと豊かになってほしい、そしてこのような少年をなくしたい。私はそう願っているし、カンボジアの人々もそれを望んでいる。しかし、発展しすぎて、今の純粋さ、暖かさを忘れて欲しくはない。今、日本はそれらを忘れつつあると思う。隣に住んでいる人がどんな人なのかわからない、友達といえばネットの中だけという人もいる。

私達はカンボジアの後、ベトナム、中国にも行ってきた。

## 日本の豊かさを痛感

現代英語学科3年次 永井 広美

自分たちで航空券をとって旅をすること、アジア圏の国へ行くこと、そして水道・電気がない生活、言葉の通じない子供たちに日本語を教えること…私にとって初めてのことであり、不安なことでもあった。こんな不安を抱きながら、私はベトナム・ホーチミンへと旅立った。ホーチミンからバスで6時間かけてカンボジア・プノンペンへ移動。プノンペンでは、マーケットや王宮、博物館などを現地の学生が案内してくれた。流暢に日本語や英語を話せることに驚き、自分たちの文化を伝えられることに感心した。プノンペンの街を歩いていたときにデジカメをとられたのは、この旅で印象に残っていることの1つである。カンボジアの警察の対応の悪さに愕然としたが、めったにないことなのでいい経験であった。

それから、プノンペンから友好学園のあるリング村へと移動。友好学園での生活は、朝5時すぎに起きて、6時に朝食、そして7時に授業開始。最初は早いと思っていたけれど、だんだんと慣れていった。それから、1コマ50分の授業を4コマやって、11時には授業が終わった。授業は、教える側の立場に立つのは初めてで、どうしたら分かりやすいか、うまくできるか不安だった。毎日自分にできることを精一杯やって、日を追うごとにスムーズに進められる



旅が日本に近づくにつれて発展した国になっていく。どの国もとても楽しかったが、自然が豊かで、人々が暖かいカンボジアが恋しくてたまらなかった。

今回の旅で私はたくさんのことを体験し、学ぶことができた。カンボジアのことはもちろんのこと、ベトナム、中国、そして日本についても見直すことが出来た。すべてが素晴らしい体験だった。この体験は自分にとって大きな収穫だと思う。

もし今アジアに行くことを迷っている人がいるならぜひ行って欲しいと思う。きっと新たな発見があるだろう。

ようになっていった。子どもたちは積極的に手をあげて発表してくれたり、歩きまわっていると質問をしてくれたり、学ぼうとする強い意志をみせてくれて、子どもたちに助けられることも多かった。やはり、ゲームが一番盛り上がった。午後は、洗濯をしたり、昼寝をしたり、子どもたちと遊んだり、市場に買い物にいたり…私は外で昼寝するのが好きだった。それから、子どもたちと一緒にバレーボールもやった。いい運動になったし、すごく楽しい時間だった。夜は、暗くなってから井戸で水浴びをした。もちろん初めての経験で、少し寒かったけれど、意外と気持ちよかった。友好学園での生活は、想像していたよりも快適だった。

最後の日に、Q&Aの時間があった。そのときの「もし、願いがかなうなら？」という質問に「教師になりたい」「医者になりたい」「弁護士になりたい」など夢を答えてくれる子供たちが多かった。就職活動が始まる大学3年生になっても、まだやりたいことが見つからない私にとって、夢をもっている子供たちは輝いてみえ、すごいと思った。彼らなら何かを成し遂げてくれると思う。子供たちと会話するなかで「将来の夢は？」と聞かれて、何度も戸惑ったことを覚えている。日本の便利さ・裕福さがそうさせるのか。カンボジアの子供たちはしっかりとした意志をもっている。私もこれからは目標をもって、それに向かっていけたらと思う。また「今、一番ほしいものは？」という質問に対しては、カンボジアの貧しい環境のせいか「知識」や「教科書」という答えがかえってきた。プノンペンの街では、小さな子が赤ちゃんの面倒をみている姿や子供がお金や物を乞う姿も見た。正直ショックだった。日本がどれだけ恵まれた環境にあるかを痛感した。

授業の最終日、それまで授業で使っていた教材を子供

たちあげることにした。「いらない」って言われたらどうしようとするのが不安だったけれど、子供たちは喜んでもらってくれた。すごくうれしかった。この授業を通して私は何か伝えることができたのだろうか。そうであることを願うばかりである。友好学園は日本語を教える場であったが、私が多くのことを学ぶ場でもあった。たくさんの子供たち、そして現地の学生と出会い、異文化に触れることができた。世界遺産・アンコールワットを訪れることができたこともいい思い出である。ここでの生活、経験は絶対に忘れないだろう。もう一度この地を訪れたい。



ま、豊かな日本に生まれ、周りの環境に甘えながら生きてきた自分がすごく恥ずかしく感じた。

そして、友好学園での最後の日、生徒全員を集め、お別れ会をした。言葉も通じなかったし、会話という会話もほとんど出来てはなかったが、私は生徒たちと別れるのが本当につらかった。私のへたくそな授業を一生懸命聞いてくれたこと。一緒にバレーボールをしたこと。プレスレットや花の髪飾りをプレゼントしてくれたこと。いろんな思い出が溢れて涙が止まらなくなった。

初日、友好学園に着いた時、確かに不安だった。日本の家族や友達が恋しくなったりもした。けれども今は、彼らと過ごした時間、その全てが大切に思えてしょうがない。2週間は人生のなかであつという間に過ぎていく時間だけれど、今年、カンボジアで過ごしたこの2週間は間違いなく、一生忘れられない宝物の時間となるだろう。

経験、出会い、自信、発見、このプログラムを通して得たことをこれからどんな形で活かせるのかはまだ分からない。しかし、自分の中での可能性が広がったことは確信している。そして、カンボジアで見たもの、触れた優しさ、この旅の中で感じた感情、その全てを無駄にしてはいけないということも。

最後に、この旅を通して一番感じたこと、それは、カンボジアは素敵なおとこだということだ。もちろん日本に比べたら、豊かでもないし、安全でもないかもしれない。しかし、私はカンボジアが大好きになった。カンボジアの空の色、空気、人々の優しさ、その全てに魅せられてしまった。きっとわたしはこれから何度でもあの地を訪れてしまうような気がしている。

## 夢をもって努力する

現代英語学科3年次 大貫 貴子

初めてのアジア。食事のこと、生活のこと、不安はたくさんあった。けれども、カンボジアのことを知りたい、カンボジアで頑張っている子供たちに会いたい、そしてなにより、自分の知らない世界を知りたい—そう思ってこのプログラムに参加した。

8月16日、航空券の手配、ホテルの手配、初めてだらけのことに戸惑いつつ、先生や先輩方の力をかりて私たちはカンボジアの首都プノンペンに到着した。

プノンペンからデコポコの道をバスで揺られ、友好学園に着いた一日目。そこは初めて見るもの、触れるもので溢れていた。手桶で水を流す水洗トイレ、テレビでしか見たことのなかった汲み上げ式の井戸。分かってはいたが、電気も水道もない生活に正直不安を感じた。友好学園に着いて早々、2週間生活の場となる教室の掃除をし、寝床を作った。カンボジアはとても暑く、長時間の移動と土と埃だらけの教室のそうじはとても体力のいる作業だった。

そして、2日目から授業が始まった。教師という立場に立ち、何かを教えるということは初めてのことであったので、午前中4時間授業をするだけで、クタクタになった。けれど、一緒に授業を担当した先生や先輩の助けもあり、そしてなにより、生徒たちの笑顔のおかげでなんとかやりきることができた。

2週間、私は彼らの先生として必死に頑張った。しかし、半人前の私だから当たり前のことなのかもしれないけれど、私が彼らに教えてあげられたこと、彼らのためにしてあげられたことはほとんどなかったように思う。それどころか、逆に私は彼らに多くのことを教えてもらった。学べることの喜び、他人への感謝の気持ち、夢をもつことの素晴らしさ、夢に向かって努力する姿勢、分かっているつもりではいたが、本当は分かっていたことがたくさんあった。そんなことも分からず、たまた



## 交流で見えたもの

現代英語学科3年次 鈴木 恵利華

私は、カンボジアに約3週間滞在しました。カンボジアの首都プノンペンに着いたとき、プノンペンは騒がしい町だと思いました。バイクが多く、3人乗り当たり前で、クラクション鳴らせば通っていいといった感じで、とても驚きました。道を歩いて渡るとき、タイミングをつかめませんでした。友好学園に行く日まで2、3日あったので、セントラル・マーケットや、王宮、トゥールスレン博物館など、見て回り、少しカンボジアに慣れ始めました。

プノンペンからプレイベンにある友好学園まで行く途中、買出しのため市場に寄りました。そのとき、何人かのボロボロの服を着た子供たちに「1\$…」と声をかけられました。とてもショックでした。どうしたらいいのかわか

らず、目をそらしました。道は、進むにつれ、舗装されておらず、でこぼこしたものになり、私たちが乗っていたバンは何回もはまりました。私はバンの中で寝ようと思っていましたが、かなりの揺れで、あまり寝付けませんでした。

友好学園に着いて、思ったより校舎は立派だと思いましたが、水道も電気もないと聞いていたので、不安でした。水は市場で買ってきたミネラルウォーターか、井戸水を利用しました。井戸水をそのままでは飲めないの、一度沸騰させて、麦茶にしたりして飲みました。これは、みんなで当番を決めて、毎日交換で準備しました。朝と夜の食事は、学園内にいる管理人さんに作ってもらいました。昼食は、これも当番を決め、あらかじめ買っておいたパンや、朝食で残ったご飯、日本から持ってきた食品、近くの市場で買ってきたフルーツなどを使って、自分たちで作りました。特に、フルーツは日本ではあまり見られないものが多くあり、さまざまなものを試しましたが、どれも美味しかったです。

昼間は、井戸で洗濯したり、昼寝したり、市場に買い物に行きました。夜は、バッテリーをつなげて蛍光灯を利用するときもありましたが、夕食時や、私たちが寝泊りした教室など、ほとんどろうそくと懐中電灯で暮らしました。そして、夜は蚊が大量発生します。寝床には、香取線香をたき、蚊帳を張り、その中にゴザやエアーマットをひいて寝ました。また、お風呂がありません。月と星の光の下、井戸で、素っ裸で水浴びしました。これはかなり気持ちよかったです。こういった生活は、不便を感じる一方で、初めての体験で楽しめました。

授業についての不安もありました。生徒の数は多いとわかっていましたが、60人以上の生徒を目の前にすると、初めは戸惑いました。しかし生徒たちは、大きな声をだし、一生懸命に文字を書いて、素直で熱心でした。すぐに、生徒と打ち解けることができました。授業では、挨拶や、動物や野菜など簡単な単語、自己紹介などを教えました。フルーツバスケットやビンゴも取り入れて、途中ルールを無視し、收拾がつかないくらい盛り上がりました。けれど、授業で少し難しいことを無理やり教えようとして失敗をしたり、ちゃんと楽しんでくれているのか不安になるときもありましたが、生徒たちに近づいて、発音がわからないところや、文字が間違っているところを教えてあげたときの笑顔を見ると、もっともっと教えてあげたいという気持ちになりました。授業の始めと最後に「おはよう」「さようなら」を生徒全員声をそろえてできたとき、本当に嬉しかったです。

また、授業が終わった後の午後など、生徒たちは遊びにきました。私は、生徒たちとよくアルプス一万尺をやりました。初めは、あんまり興味もってこないかもしれないけど、時間潰しになるかと思って始めました。しかし、生徒はかなり興味津々で、盛り上がりました。女の子より男の子のほうが食いついてきて、私を見るたびに手をだして、何回も何回も繰り返しやりました。アルプス一万尺があんなにハードな遊びになるとは思いませんでした。他にも折り紙や、だるまさん転んだ、バレーボールなどをしてたくさん遊びました。女の子は基本的におとなしく、恥ずかしがりやが多かったのですが、花を摘んできて、花飾りを作っ

て耳にかけてくれたりしました。たまに、暑かったり、疲れていて、今日は昼寝していたいな、といったときでも、生徒たちに「エリカ！」と笑顔で呼ばれると、ついつい一緒に遊んでしまいました。2週間の授業を終えて、勉強熱心で、いつだって元気で笑顔な生徒たちと別れるのはとても寂しかったです。

私たちのアシスタントとして通訳や生活面で世話してくれた、友好学園の卒業生や大学生とも、とても仲良くなりました。彼らは、プノンペンに着いたときから、友好学園でのボランティアが終わったあとの、アンコール遺跡観光のためシムリアップまで来てくれて、案内してくれました。彼らとは、カンボジアに滞在中朝から晩まで一緒に生活し、いろんなことを話し、語りました。

アンコールワットに行ったとき、とても感動し、カンボジアの偉大さを感じました。私が「こんなに凄いものを造るなんて、カンボジアの人たちは本当に凄い！」と、案内してくれた大学生に話したとき、「そんなことない。昔は凄かったかもしれないけど、今は落ちたよ」と言われました。一緒に過ごし、歳も近い彼から聞いたこの言葉は、とても響きました。確かに、カンボジアは日本などと比べて貧困で、発展途上国です。もちろん、カンボジアのすべてを見たわけではありませんが、プノンペン、友好学園、アンコールワットと、さまざまなカンボジアを見て、ただ旅行に来ただけでは体験できない、素晴らしい出会いをたくさんしました。私が出会ったカンボジアの人々、友好学園の生徒たち、一緒に生活した卒業生や大学生は、みんな優しく、明るくて、いい人ばかりで、そして、みんな未来のために頑張っている人たちでした。私も彼らに負けないように、頑張っていきたいです。

## 私人間らしく生活できる場所

現代英語学科 4年次 大内 未貴

◆ 2007/8/15

今日はカンボジアに行く日。7時くらいに起床。ご飯を作って食べて、PCを開いて準備をする。9時30分くらいに家を出た。

これまでに何度か海外にでた経験はあったが、発展途上国に行くのは初めてであった。重いバックパックを背負うのも初めてだった。勝田駅で大貫さんと待ち合わせ。バスに3000円を払って乗り込む。ここに戻ってくるのは約1ヶ月後だ。

私は今現代英語学科の4年で、今年卒業する。卒業後は日本語教師として海外で働こうと思っている。このボランティアで、私はひとつ確かめたいことがあった。それは自分が日本語教師としての資質があるかどうか、日本語教師としてやっていけるかどうかを見極めたかった。その思いと決意を胸に、私はカンボジアへと向かった。

カンボジアへはバスで入国。しばらく走り、\$25払って



ベトナムとカンボジアの国境を越えた。いよいよだ。容赦ない日差し、行き交う人々、たくさんのバイクとトゥクトゥク、空が果てしなくキレイだなー。これがカンボジアの第一印象だった。私たちはプノンペンで余日を過ごし、ボラティアの仲間達と合流した。

◆ 2007/8/19

今日は友好学園があるリング村に行く日。荷物をまとめ、バスに乗る。途中で食料を買出し、船に乗る。走るにつれて景色が変わっていく。何もない、ただっ広いところ一本のやしの木と、後ろには真っ青な空と真っ白な雲。今思い返しても、私がカンボジアで一番好きな景色だ。約6時間かけて友好学園があるリング村に到着。ほこりだらけの教室を掃除して、なんとか生活できるスペースを作り上げる。蚊帳を張り、ろうそくなどの必需品をそろえる。昼食をとり、足りないもの、食料品などを市場に買出しに行く。夕食後、明日からの授業計画の確認と話し合いをして、井戸で水浴びをした。その日は疲れもあってか、早めに眠りに就くことができた。

◆ 2007/8/20

5時起床。いい天気だ。朝食をとり、外に出てみる。だんだん日が昇って暑くなる。今日はどのくらい生徒が集まるんだろう。期待と不安が入り混じっていた。集合場所に行ってみると、約200人近い生徒がいた。彼らを4つのグループに分け、一人ひとりずつにネームカードを作る。根気のいる作業だった。だが私の心の中は、これからやると始まるというワクワク感でいっぱいだった。全ての生徒を振り分け、9時から授業を開始する。私達はまずひらがなを教えた。用意してきた教案を見ながら、ぎこちなく授業が進む。私はこれまでに個人に日本語を教えた経験はあるが、子供に、しかも50人以上を一遍に相手した経験がなかった。経験を応用しようとしても、勝手が違いすぎる。一からの授業計画が必要だった。ずっと日本にいる時から、授業のことばかりが不安だった。子供たちは楽しんでくれるのだろうか、うまく授業を進められるか。その不安を吹き飛ばしたのは、他でもない、子供たちだった。楽しい。楽しくて仕方ない。自分がきっと、この先もずっとやりたいことはこれなんだ、とすぐに確信した。それを感じた時から、日本語教師としての将来を決意した。私のひとつの動きや言葉に、子供たちが反応する。これだけで嬉しくて楽しくて、涙が出そうだった。しかし反省点も多々あった。子供の声が大きくて、まるで叫んでいるみたいで、発音の点では良くなかった。自分が集中し過ぎてしまって、仲間

に指示ばかり出してしまった。すべて時間通りに進んだが、授業としての手ごたえはあまりなかった。授業が終わって、心地よい疲労感と共に充実感で満たされていた。

◆ 2007/8/21

4時半起床。朝日を見ようと塀に登ると藤田先生とらくだの人がいた。一緒に景色を眺める。カンボジアで一番初めに見た朝日は紫色だった。風が気持ちよかった。



カンボジアは貧困の国。いつからかそんなイメージが私の頭の中にあっただ。しかし実際に行ってみると、意外に発展してて、大きなビルや建物、デパートなどもあってびっくりした。もちろんカンボジア全土がそんな訳ではない。村で2週間を過ごしたが、そこには大きな建物や便利なものは何もなかった。ただ小さな店や、そこでこと足り程度の市場があるだけだった。都会と田舎、どっちにも良さがある。都会は何でも揃うし、お湯もでるし、電気もあるし、お金が少しあれば、そこで生活することはきっと楽しい。退屈することはない。でも私は田舎が大好きだ。暗い、電気もない生活。月明かりの元での水浴びを毎日楽しんだ。湿気があるから毎日汗をたくさんかいた。風が気持ちいい日に外でのお昼寝。寝転がって見る、風にそよぐ洗濯物が好きだった。でこぼこの、太い道。たくさんの動物。やしの木。突き抜けるような晴れた空。毎日さまざまに形を変える雲。月。星。ゆっくり流れる流れ星。ムーンアンブレラ。そして何より温かい、カンボジアの人達。そこは私が人間らしく、人間として生活できる場所だった。

## またいつでも会える

青山学院大学国際政治経済学部2年次

藤田 花江

去年の夏に始めてこのプログラムに参加し、今回が私にとって2度目のカンボジアでした。去年行って私がもったカンボジアの印象は、明るくて親切でおいしくてのんびりしていて、とても居心地の良いところでした。唯一耐えられなかったのは、シムリアップのバスストップに集まってくるすごい数のタクシードライバー。バスから降りると、荷物を受け取る際もあたえられず囲まれてしまいました。私達の間で会話が全くできないくらいの大声で怒鳴ってい



ます。ドライバー同士が客を取り合って怒鳴り合ったりもしています。ドライバーさんたちを追い払おうと、おまわりさんは手に持った電気のビリビリ出る棒をブンブン振っています。慣れない私には不快なものでした。全体を通して嫌な思いをしたのはそのくらいで、その他は街でも田舎でも良い思い出ばかりでした。さらにカンボジアを知ること嫌な印象は持ちたくはないなぁと思って、少しドキドキしながら二度目のカンボジアに出かけました。

そして今年の夏、いろんな人に会っているんなものをみて私はカンボジアをさらに好きになって帰ってきました。

何より嬉しかったのは友好学園で、去年私達の授業にきてくれた子どもたちに会えたことでした。1年経って私たちは去年よりもずっと言葉でのコミュニケーションができるようになりました。女の子たちとは、彼氏いるの？あの彼ハンサムだと思う？なんて話で盛り上がりました。楽し

かったです。

去年帰るときは、もしかしたらもう会えないかもしれないと思うととても寂しくて涙でお別れをしました。でも去年、今年と続けて行ったことで、またいつでも会えるという余裕みたいなのがお互いにでき、同じ瞬間に同じ世界に暮らす人たちなのだ改めて感じる事ができました。写真を何度もながめているだけでは、写真の中の世界になってしまうところでした。

今年の新7年生も元気で人懐っこくて本当に可愛かったです。私が知らないとわかるクメール語も手遊びも丁寧に教えてくれました。罰ゲームは鼻の頭をちょんとつままれます。私はいつもつままれる側でしたが、男の子も女の子もそのしぐさがとても可愛かったです。

ちなみにシェムリアップのバスストップも入り口にゲートがついてかなり改善されていました。

## オークン カンボジア

慶應義塾大学経済学部 2 年次

向 恒生

私がそれまで持っていたカンボジアについてのイメージと言えば、「アンコールワットがある貧しい国」。正直それくらいだった。今回ボランティアに参加したのも、誘いを受け、何やら過去の参加者達はかなり貴重な経験をしているらしいとの話を聴き、自分も味わってみなければ！と思ったからで、純度のあまり高くない動機だった。

プノンペンからバス（というよりあれはバンだと思う）に大いに揺られ、エンストに継ぐエンストでもうダメか…？と思ったころプレイベンの友好学園に到着した。これから2週間過ごすことになる、少しの風も立てたくないほど砂埃の積もった教室を掃除するところから私達の生活は始まった。すぐ翌日からは授業もスタートだ。生活面もさることながら、日本で過ごす夏休みとはかけ離れた環境に、すでにマックスだと思っていた期待と不安はこのとき一気に振り切れ、不可解なテンションで雑巾がけに没頭した。

生徒達は最初、挨拶くらいしかクメール語を話さない教師陣に少し緊張した面持ちだったが、すぐに外国人への興味が隠しきれなくなったようだった。人懐こい笑顔と仕種でたちまち心を捕まれてしまった。

彼らの勉学に対する姿勢や熱意、そして集中力には目を見張るものがあった。あいうえお50音、挨拶、自己紹介、単語…毎日の授業に遅れないよう、自宅での復習にも余念



がなかったのではないだろうか。前回難しそうにノートを見詰めていた生徒も今回は堂々と手を挙げて、ということも珍しくなく、授業中に留まらない彼らの努力が伺えた。休み時間にはクメール語を逆に教わりもした。また、現地ガイド・通訳をしていただいた友好学園の卒業生たちも、私たちと会話する中で知らない言葉に出会ったとき、「どういう意味？これであってる？」と聞き返しながらかメモを取ることがあり、少しでも多くのことを吸収しようと努めていた。カンボジア人にとっての勉学の重要性、学べることにに対する感謝、それらは日本人にとってのそれより遥かに大きいものなのだと実感した。理由としてはやはり「誰もが勉強できるわけではない」という意識によるものが大きいと思う。小学校入学率はカンボジア全土で約70%、中学校への進学率はわずか35%~40%程度、高校となるとその進学率は20%にまで激減する。クメール語の読み書きができるカンボジア人は約37%しかいない。これらは2001年度の数値であるのでここから多少の向上は見込まれるにしても、現在もカンボジアは教員不足、学校不足に悩んでいる。

カンボジアには、経済的格差の問題、先述した教育の問





題、治安の不安定、衛生面など、暗い話題はいくつも転がっている。しかし、そういうものを忘れさせる独特の明るさや優しさをカンボジア人は持っていた。授業の合間に手を引いて、あるいは放課後に自転車でどこからともなくやってきて、遊びをせがむ男の子達。隠れて摘んだ花をくれる女の子達（私はあまりもらえず）。いつの間にか私たちが

ボランティアされに来ているのだと錯覚するほど、人々の温かさと笑顔をたくさんもらい、瞬間に二週間が過ぎていった。別れはさほど寂しくなかった。もしまた会いに来れば、いつでも同じように迎えてくれることが想像できたからだ。ふと、自分の田舎がもう一つ増えたような気がして嬉しかった。

# 行きたいと思う 場所はひとつ でした

文化交流学科4年次  
戸田 亜希子



## ◆2度目のカンボジア

2年前に本プログラムへ参加した時、「絶対また来る」と心に決めていました。大学生最後の夏休み、行きたいと思う場所はひとつでした。「友好学園に行きたい。みんなに会いたい」と2度目のカンボジアへ向けて気持ちは高ぶっていました。

以前と同じルートでタイからカンボジアを目指しました。カンボジアのビザを取得し、入国すると目にするのは物乞いをする子供達の姿です。真っ昼間に子供が子供を抱えて「ワンダラー、ワンダラー」と私の服を引っ張ります。川には相変わらず大量のごみがあふれ、そこで遊ぶ子供達の服はぼろぼろ。ここには2年経っても変わらない現実がありました。私は彼らを見つめ、忘れないでいることしかできません。

## ◆大好きな風景、友好学園へ

プノンペンでボランティアメンバーと合流し、友好学園のあるリング村へ向かいました。水やパンなどの買出しを済ませ、メコン川を渡り国道1号線を走ると、懐かしい大好きな風景が広がってきました。どこまでも広がる空と大地、水、木、動物が一体となっている景色に思わず顔がほころびました。

2年前は今回のように国道1号線を走っていた時、車が故障してしまいドライバーが修理をするというハプニングがありました。車が直るまで私達は漁をする人を見ていたり、魚を釣ろうとしてみたりとゆったりと過ごしました。今回もこのような足止めをこっそり期待していたのですが、残念ながらにも起こりませんでした。実際、エンジントラブルはありましたがドライバーが力ずくで車を進めてしまい、外でのんびりする暇もなくすんなりと友好学園へ到着しました。

## ◆教える側、教わる側という枠組みを越えて

5時に起きて7時から授業開始という生活が始まりました。自分でも情けないほど初日の授業はあたふたしてしまいました。時間配分ができない、授業の進め方が下手、内容が難し過ぎる、など反省点はとてもたくさんありました。しかし一緒に授業をする仲間と毎日話し合い、工夫を重ねる度に反省点は減りました。

今年は3人組みだったので自分のクラスに余裕があるときは他のメンバーのクラスを見学しました。「あ、この内容楽しそう。〇〇ちゃんはっちゃけてるなー」と授業内容やメンバーの意外な一面を見ることができました。

私達のクラスは2週目に「幸せなら手をたたこう」を教えました。3人で何度も何度も歌い、徐々に歌える子も出てきました。ごによごによでしか歌えない子も、①幸せなら手をたたこう（パンパン）、②幸せなら足ならそう（ドンドン）、③幸せなら手をつなごう（手をつなぐ）の（ ）の動作部分はみんな張り切ってやってくれました。張り切りすぎて「手をたたきすぎて痛いよー、足もドンドンやりすぎて痛いよー」という悲鳴も聞こえてきましたが、元気いっぱいの際は楽しくて仕方がない様子でした。みんなで歌い、みんなで手をつないだ時、とても感動しました。教える側、教わる側という枠組みを越えて彼らと一つになれたような気がします。

友好学園での生活はあっという間でした。通訳として授業を手伝ってくれた学生達と毎日たわいもない話しをし笑ったこと、放課後遊びに来てくれた生徒達といつまでも手遊びをしたこと、市場までの道でバイバーイと手を振ってくれる子の多さ、空一面に輝く星を見て動けなくなったこと、カンボジアに来なければ知ることのできなかったことや触れることのできなかつたことがたくさんあり、カンボジアに来られて良かったと心から思いました。

このような機会を与えてくれた藤田先生、「いってらっしゃい」と送り出してくれた両親に心から感謝しています。



# 電気も水道もない 暮らしも悪くない



文化交流学科 5 年次 田中悠介

## ◆ 3 度目のカンボジア

「日本でチャラチャラ遊んでないでカンボジアに行きなさい。」2 年前、あるいはそれ以前の私に直接会うことが出来るなら真っ先にこれを伝えたい。

私がカンボジアを訪れるのは今年で 3 度目になる。タイの首都バンコクから陸路で国境越えというコースを辿った。毎年夏にどこかへ出かける際には 30 日チケットを買う。しかし、今年は学生最後の年（予定）ということで少し長めの 43 日のものを選んだ。7 月 28 日に出発した。3 度目ではあったが旅に対する不安はあった。今までと異なり、私を不安にさせたのは「一人旅」という事実だったのかもしれない。しかしそんな不安は時間とともに薄れ「一人でいる方が色んな人と話すきっかけを作るのは簡単だな」と思うまでになった。もちろん寂しいと感じる時もあることは否定できないが。

## ◆ 不思議な感覚

まずタイ北部の町チェンマイを訪れ、学園祭での「アジアンバザール」の買出しを済ませた。それからバンコクへ戻り、一路アンコールワットのある街シェムリアップへ。タイからカンボジアへ国境を越えるとなぜか故郷へ帰って来た様な不思議な感覚があった。

シェムリアップへ着くと、初めて訪れた時の友人が迎えてくれた。お互いの下手な英語や、それを補うためのジェスチャーに懐かしさを感じた。

## 「やりがい」「面白さ」

私が今回カンボジアへの旅を通して求めていたものは何であったかという、きっと「人と接すること」や「コミュニケーション」だったと言える。そう聞いて「日本にいてもそんなこと出来るだろう」と言う人もいるかもしれない。しかし一体「コミュニケーション」や「人と接す」など、それらの中で「言葉」が占める割合はどれくらいなのだろう。私自身なぜだか理由はわからないのだが、言葉が通じなければ通じない状況である程私は燃えてくる。必死になって伝えることの中に「やりがい」とか「面白さ」を感じてしまう。

## ◆ 奇跡の瞬間

A という名の世界に一人しかいない人と会うためには世界は残酷なほど広すぎると思う。見ず知らずの人間同士がある日突然出会い、言葉もまともに通じない人間を相手に必死で何かを伝えようとする、あるいは相手の伝えようとしていることを理解しようと働きかける。それだけのことなのだが、その行為そのものに美しさを感じるだけでなく、その最中に私は最も「自分が生きているような感覚」を得る。自分と誰かが会おう場面はまさに奇跡の瞬間とも呼べる。人間が 80 年生きるとしたらその中で幾度その奇



跡を経験するのだろうか。そう考えるだけで生きていることに感謝したくなる。

## ◆ 発音の正確さ

私は今回、現代英語学科のハリス・アイヴズ先生と学生の大貫貴子さんと共に英語を教えた。普段、英語を使ってある程度の意思疎通が出来ていても授業の中でゆっくり発音することや文章の中に単語が幾つあるか理解できるように発音すること（単語ごとに手拍子を打ちながら発音する）はとても難しく思えた。というのは手拍子を打つことが難しいのではなく、一つ一つの発音に正確さが求められるからだ。文章になっていたり、会話の際であればジェスチャーを使ったり、もしくは文脈から判断するなど、その単語の意味が何なのかという手がかりが様々な形で存在するが、授業の中ではそれがフラッシュカード（dog なら犬の絵が描いてある）と先生たちが発している「dog」という音だけなのでそういう手がかりになる要素が少ない。少なければ少ない程その少ない要素である犬の絵や発音の正確さが求められる、というか認識しやすいものである必要があるのかもしれない。私たちの授業の中では先生が 3 人いたわけだが、その 3 人が同じ意味の単語をまるで違うように発音していたら生徒たちは混乱するだろう。そういう点において一番ポロが出やすいと感じたのがゆっくり発音することと単語の集合としての文章を意識して発音することだった。もっとも、様々な種類の英語を聞けるという意味では良かったのかもしれないが。

最後に、電気も水道も無い暮らしも悪くない。目的や夢が無いことに比べればずっと健康的なのかもしれない。2 年前カンボジアを訪れる以前の自分は何か諦めに近いような気持ちを自分自身に対して抱いていた。そんな自分を多少なりとも変えてくれたカンボジアとそこに住む人々に深く感謝している。

# ハイテク人間 in Cambodia

～変わった視点からの報告～

児童教育学科3年次 下山田 尚久

## ◆チョムリアプスオ！カンボジア

車から降りると青空が広がっていた。周りに山は見えず、地平線の先まで見渡せる風景、照りつける日差し、日陰に入ると感じる涼しい風。私は大きく伸びをして、周りを見渡しながらか、懐かしいようだが日本とは違う空気を肌にかけて「カンボジアに来たのだな」と実感した。今はカンボジア日本友好学園へ行く途中、エンジントラブルのためほんの少しの休憩。これから2週間、カンボジアの新中学1年生に日本語を教えるのだと心の中で自分に言い聞かせ、再び車に乗り込んだ。

## ◆悩むよりまず行動！

私が本プログラムに参加した理由は、3つある。1つめは、労作体験教育のポイントを稼ぐためにボランティアを探していたこと。2つめは、海外に行ったことが無かったので、観光旅行では無くより自由度が高く、現地の様子を見ることができるプログラムは無いかと探していたこと。3つめは将来教員になるとして、言葉の通じない子供たちと、さまざまな手段を使ってコミュニケーションをとり、何かを教えるという経験は役に立つのでは無いかと思ったこと。しかし、それらの理由は即決で行動するために、自らが即興で「具体的な理由」をひねりだしたものであったようだ。カンボジアの空気を吸って伸びをした時点で、そんな小難しい理由はどこかに飛んでいってしまった。

私は自分が何か行動を起こす時に自分自身が納得できる小難しい理由を有していなければ、行動を起こせないという癖があるようだ。今回は何とか自分自身を無理やり納得させ、即決することができた。

## ◆ハイテク人がカンボジアで生活できるか？

今回カンボジアに行くにあたって、いろいろ悩んだことがある。それは、普段情報機器にどっぷり浸かっている私が、それらを取捨選択して持って行くものを決めないと行けないことだ。これは喫煙者が極度の減煙を強いられることと等しい。また、電気が無いという話を聞いていたので電源事情にも頭を悩ませた。一応、電池、太陽光充電電池、バッテリーの3つを用意した。

カンボジアに来てまで情報機器に頼るなど言われそうだが、現地に行くまでは真剣に悩んでいたのである。

結果から言えば、想定していた電源事情もソーラー発電設備があり、事なきを得た。携帯電話も電波が通じ通話も行うことができ、プノンペンではインターネットも利用できた。

また、驚いたことに、現地の生活ではあまり不便も感じず、人間の環境適応能力も伊達じゃないと感じた。それよりも、一番不便だと感じたのは洗濯である。高校時代洗濯は手洗いではなければならなかった経験から、できるだけ

化学繊維のものを用意し、洗濯が簡単にできるように準備していたはずが、現地の暑さのため想定より多くの洗剤が必要であるとか、スコールが多いため室内で干す機会が増え部屋干し臭が気になったりとか、乾燥を速めるためきつく絞るすぎて手の皮が剥けたりなど、上記の情報機器より洗濯機と脱水機がほしくなった。

## ◆体当たりの授業

私の所属学科はPe科だが、先生として子供たちに何かを教えるという経験は全く無く、今回の2週間のプログラムが初授業となる。来年の教育実習の予行練習と位置づけ、挑んだ。毎日が子供たちと体当たりの授業。大きな口で、にっこりと、大げさに。

子供たちの学習意欲は本当に高い。自分たちがこんないい加減に教えていいのだろうか疑問を持つこともある。しかし、疑問を吹き飛ばし、今自分ができる精一杯を子供たちにぶつけた。授業を終えた後は反省の気持ちと充実感。子供たちに授業の感想を聞いてみたい。

## ◆楽しいと思う気持ちが大切

未熟な私では2週間の授業を行う中で子供たちに学んでもらえる内容は少ない。その中で技術も経験も無い私が、子供たちに感じ取ってもらえそうなもの、私自身が感じ取ってもらいたいものを厳選した時、自分の中でひとつの目標ができた。それは、子供たちに「日本語って楽しいな。日本語で会話してみたいな」という気持ちを持ってもらうことである。この気持ちを感じ取ってもらえれば、幸いである。

## ◆得られたものとは

カンボジアの子供たちの表情はとてもきれいである。国内の情勢や貧困など、いろいろな事情を抱えて毎日を生きているとはとても思えないほど、彼ら彼女らの表情は生き生きしている。それは、今の日本では見るのが難しい「本当の表情（本音）」であるからかもしれない。日本では子供たちでさえ本音と建前を使う。私はしばらくこの純粋な生きた表情を見ていなかったような気がする。

日本語を教えにボランティアに行った私が、逆に人間の美しい生き生きとした表情をお土産にもらってきたのかもしれない。



カンボジア日本友好学園 日本語・英語ボランティア07 会計報告		担当・大内未貴、鈴木麻由
		単位は全て us\$
<b>収入の部</b>		
参加者拠出金	\$93 × 13 人 + \$54 × 4 人	1425
RAKUDA グループより寄付金用		200
友好学園施設使用料用		1300
鈴木さん（茨城国際学院）食事代		37
IC 補助金（学生企画奨励金）		500
<b>収入計</b>		<b>3462</b>
<b>支出の部</b>		
8月18日	夕食（鍋）25人	117.5
8月19日	食品買出し（パン、チーズ、水ほか）	31
	バス2台 PPN → 学校	100
	昼食 17人	17.5
	蚊帳2張	10
	タライ	2.5
8月20日	スプーン×10, 水×24	5.25
8月21日	食品（卵、ラーメン、砂糖、果物、牛乳ほか）	23.25
8月24日	19-24日の朝夕食代（213食？）	328.5
	大学生通訳アシスタント（\$3 × 4人 × 7日）	84
8月25日	バイクタクシー 学校 → ネックルーン 18人	16.5
	昼食 18人	62
	食品、桶	6
	夕食 18人	38
8月26日	ホテル宿泊料	108
	食品（ミルク、バナナ、パン、ヤシ砂糖ほか）	32
	昼食 18人	12
	バイクタクシー（ネックルーン → 学校）	15.25
8月28日	水、果物	5
8月29日	水、果物、ジュース	23
	昼食 17人	15
8月31日	氷（\$5）、ジュース（30本）	20
9月01日	プロパンガス代、お礼	30
	バス1台 学校 → PPN	50
	26-01日の朝夕食代（217食？） + パーティー食費	326.5
	大学生通訳アシスタント（\$3 × 4人 × 5日）	60
9月02日	昼食（ソリヤ）	62.8
	夕食（中華）	73
	トゥクトゥク	12
	PPN 青空学校への寄付	400
帰国後 友好学園施設使用料		1200
準備の買出し分清算		
	文房具 58、皿 17.8、筆・墨汁 48、墨汁 6、味噌汁 65	194.8
<b>支出計</b>		<b>3481.35</b>
<b>収支差引</b>		<b>-19.35</b>



以上が8月18日から9月2日までのプログラム本体の経費計算。ただしプノンペンでのホテル代（1泊10ドル程度×3泊）は部屋によって料金が少々異なったため、個人払いとした。このほか実際には日本からの渡航費（5万円～10万円）、ビザ、シェムリアップ観光費用などを各自が支出している。アジアンボランティア・サポート基金から各参加学生に2万円の補助金を支給する予定。

#### 参加メンバー

文化交流学科 1年次・鈴木麻由 4年次・戸田亜希子 5年次・田中悠介 現代英語学科 3年次・大貫貴子、鈴木恵利華、永井広美、矢内利沙 4年次・大内未貴 児童教育学科 3年次・下山田尚久  
慶應義塾大学経済学部 2年次・向恒生 青山学院大学国際政治経済学部 2年次・藤田花江  
教員 Harris Ives、藤田悟 RAKUDA グループ 平井雷太、松田恭子、衛藤寿一、大岡真理子

このチラシをお持ちいただくと  
1000円以上お買い上げの場合、  
10% OFF!! (カフェを除く)

# あじあん ばざーる!

## Asian Bazaar 07

さらにパワーアップ!!  
本場ベトナムのフォーも登場

アジア  
カフェ!

8号館で会いましょう  
◆学園正門から一番奥です◆

アジア  
カフェ!

◆学園正門から一番奥です◆  
8号館で会いましょう

さらにパワーアップ!!  
本場ベトナムのフォーも登場

## Asian Bazaar 07

# あじあん ばざーる!

このチラシをお持ちいただくと  
10% OFF!!